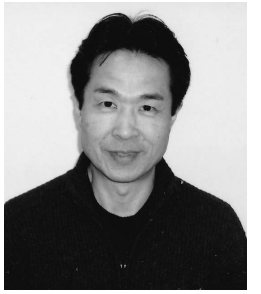
在京飯田高校同窓会・総会報告～演奏会

夢のあとさき ～音楽で呼び覚まされる時間

木下岳文（高32回）



●きのした・たけふみ
飯田市上郷出身。東京藝術大学大学院作曲専攻修了。平成12年、飯田高等学校独立100周年記念音楽会にて、100周年賛歌の作曲を担当。現在は音楽講師。最近、小諸の懐古園を訪れ、藤村の詩に想いを馳せました。

在京同窓会初の演奏会

♪アメイジング・グレイス……過去を悔い神の愛への感謝を込めた歌。この最後のアンコール曲が終わると、私はピアノから離れて歌い手のもとに歩み寄り握手を求めた。彼女の顔には汗とも涙ともつかぬものが光っていた。その時、この演奏会に彼女がかけてきた思いが、温かい拍手の中で報われたような気がした。

在京飯田高校同窓会では初の試みとなった演奏会。大原千奈美さん（高32回）が歌をうたい、私がピアノ伴奏をすることに決まってから約半年間、演奏会に向けた準備が行われた。最初の顔合わせで彼女は高校の思い出、音楽の話等と一緒に、大切な親友を最近亡くしたことを話した。卒業からの長い年月が変えた運命…、そして私たちは暑い夏から秋へと季節が変わっていく間に、諏訪のスタジオで計6回の合わせを行った。

本番前日は秋葉原のスタジオを借りて、リハーサルと最後の打ち合わせが行われた。千奈美さんにとってこの日が、同窓会の準備を重ねてきた幹事会のメンバーと初顔合わせとなり、その夜は高校卒業以来の懐かしい仲間で会食となった。

大原（旧姓・木下）千奈美さんは、松本から参加

歌と校歌のピアノ独奏に込めた想い

本番当日、午前中に会場で慌ただしく合わせ。出番直前は楽屋―いや、せわしく料理の準備をしている厨房で待機した。

いよいよ舞台登場である。歌の千奈美さんは濃紺のドレスに光沢のある薄いベージュのボレロ。私はスーツ姿。1曲目は信州軽井沢が舞台で、雨に濡れる「落葉松」をのびやかに抒情的にうたった。2曲目は一転、彼女の専門であるフランス語による歌曲、フォーレ作曲「夢のあとに」である。夢で美しい女性と出会うが目覚めて哀しみにくれるという幻想的な歌。その磨き抜かれた情感豊かな歌声は、同窓生たちの心をつかんだと思う。この後、私が校歌をピアノ独奏に編曲した「飯田高校校歌による祝典幻想曲」を演奏し、同時に校歌の歴史がスライドによって紹介された。明治39年、飯田中学に初代のピアノが購入され、そのピアノを使って校歌を作曲したのが当時25歳の音楽教師であった井出茂太。校歌は当初「南信男子」とか「南信健児」という題名だったようだ。懐かしい校歌をピアノ曲にアレンジするという試みも、温かい拍手をいただけた。

「飯田高校校歌によせる祝典幻想曲」を弾く筆者。校歌の躍動感あふれるリズムをさらに強調。軽快なメージと故郷を思わせる滑らかなメロディを組み合わせたイ

プログラム後半は、「赤とんぼ」「カチューシャの唄」「里の秋」「翼をください」と親しみやすい日本の歌によるメドレー。そして最後は、千奈美さんが自ら選んだ「アメイジング・グレイス」だった。同窓会のために、32回生の友等のために、そして亡き親友のために、万感の思いを込めてうたった。

歌をうたうことは喜びであり、またあるときは祈りでもある。高校を卒業して以来、喜び、悲しみ、戦いながら過ごしてきた日々。悔やまれることもあったに違いない。しかし在京飯田高校同窓会の、この25分間のささやかな演奏会が、彼女の、またその場にいて聴いてくれた同窓生の皆さんの、新たな素晴らしい未来への応援歌となってくれたなら、これに勝る喜びはない。